

## BMC プログラム：海外派遣報告書

理学研究科 高分子科学専攻  
高分子物理化学研究室 博士前期課程 2年 藤田美穂

参加学会：the 5<sup>th</sup> International Workshop of Far East Asian Young Rheologists (5<sup>th</sup> IWFEAYR)

会場：Busan University (Korea)

派遣期間：Jan. 21 – 23, 2010

私は、インテグレート大学院理学教育 (BMC) プログラムの支援を受けて、釜山大学で開催された the 5<sup>th</sup> International Workshop of Far East Asian Young Rheologists (5<sup>th</sup> IWFEAYR) に参加させていただきました。

学会は、朝 9 時から夜 7 時まで開かれました。一つの会場を通して行なわれるため、最後の発表まで熱が冷めません。この学会の主役がまさしく名称のとおり「レオロジーを学び志す学生」であることを、参加したことで実感しました。普段参加していた学会とは異なり、学生同士が非常に熱い質疑応答合戦を繰り広げていました。先生方は、その熱戦を盛り上げるために言葉を加える程度で、熱く盛り上がる学生を見守りつつ議論を軌道修正してくださいました。

今回、私は口頭発表で参加しましたが、なんとか原稿を暗記して臨んだ初めての英語での発表は、質疑応答で化けの皮が剥がれる苦いものでした。付け焼刃の英語では、相手がどこを疑問に感じていて、何を提案してくれているのか、具体的に理解できずほとんど答えられなかったのです。ぼんやりとキーワードはわかるものの、議論にはほど遠く、今も悔いが残ります。一方で、韓国やタイの学生は、自身の研究に対する自信と英語力で、質問にも物怖じすることなく応戦しており、会場に熱気が増すのがわかり、一層悔しさを感じました。

学生間の交流も目的としているこの学会では、宿泊や食事、エクスカージョンも大事なイベントです。四人一部屋の相部屋でルームメイトに日本人はゼロ。コミュニケーションは英語とボディランゲージ、そしてまさかの日本語でした。私が英語は苦手であることを察した韓国の学生が、日本語で話しかけてくれたのです。さらに、英語で伝わらなかったことを日本語で言いなおすと伝わったときは本当に驚きました。高校から第二外国語を学ぶ彼らは、英語だけでなく日本語さえも会話できるほどに使いこなすのです。韓国の外国語教育プログラムにも興味を持った出来事でした。また、韓国、特にソウル大学の学生と接することができたのは強い刺激になりました。彼らは皆、今後この分野を担っていくという意識が高く、会話の端々にそれが感じられ、そこに自分がいることが恥ずかしくなるほどでした。

他国の学生の意欲の高さをひしひしと肌で感じ、日本が置いていかれるのではという危

機感を感じたのと同時に日頃の怠慢を恥じ、もっと頑張らなくてはと意識を新たにすることができ、本当にいい機会をいただいたと思います。研究に対する意識の改革および視野の拡大ができるこのような場に参加したのが、卒業間近の時期であったことは少し残念で、せめてもう一年早く参加しておけばよかったと少し後悔しています。

最後に、このような機会を与えてくださいましたインテグレート大学院理学教育プログラムに関わる皆さま、および今回参加を強く勧めてくださった井上正志教授に心より感謝申し上げます。



**Oral presentation.**



**With Korean students.**